

実践報告

キャンプの効果を検証する
 - A 大学生のレポートからの分析 -
 Verify the effect of camp practice
 - Analysis from student reports -

山根 真紀¹⁾ 時安 和行²⁾

Maki YAMANE, Kazuyuki TOKIYASU

1) 日本福祉大学 スポーツ科学部

Faculty of Sport Sciences, Nihon Fukushi University

2) 至学館大学 健康科学部

Faculty of Wellness, Shigakkan University

1. はじめに

キャンプは野外活動の1種目であり、野外教育の教材として位置づけられている。野外教育とは、「自然の中で組織的・計画的に一定の教育目標をもって行われる野外活動・自然体験活動の総称で、自然、他存在、自己についての創造的、調和的な理解と実践を直接体験を通して育む総合的・全人的な教育である」¹⁾と定義されている。学校教育現場においてもキャンプの直接体験による教育的効果をねらい、集団宿泊活動や自然体験活動といった体験活動の充実の必要性が提言されている。2008年公示の改訂学習指導要領²⁾においてもその重要性は引き継がれている。

大学教育においてもキャンプを中心とした野外スポーツは、「健康・体育・スポーツに関する学科の専門科目」として、教員養成、一般教養、幼児、児童、こどもに関する学科、福祉関係など幅広い学科で実施されている。体育系大学を対象にしたキャンプの実施状況に関する調査³⁾によると89.2%の大学

が、指導者として必要な知識や理論・技術を身につけるため、資格取得のため、集団生活を通じて社会性や協調性を身につけるためなどの目的で実施している。

近年の大学生の実態として「人とうまく付き合えない」、「人のうわさが気になる」「無気力」などといった対人関係の問題を抱える学生が増加している⁴⁾なか、キャンプ実習はこれらの問題に対し有効であり^{5,6)}、さらに、組織キャンプ体験には自己効力感を高め、無気力感を改善する⁷⁾といった、自己変容の効果も報告されている。

以上のようにキャンプ実習では、非日常的な自然環境の中での直接体験により、自分と他者の関係、および自己変容の効果も実証されてきている。しかし、キャンプ実習の形態は宿泊日数、宿泊形態、プログラムなどが異なり、多様であるため、すべてのキャンプ実習が同様の効果を得られるとは言えない。さらにこれらの効果については、「キャンプ中のどのような要因がその個人の成長に直接影響を及ぼし

ているのかについてまだまだ不明な点も多く残されている」⁸⁾との意見もある。今後より多くの実践研究の蓄積により、キャンプの有効性を確認していくことが求められる。

そこで本研究では、A短期大学における野外運動の実習科目（選択必修）として、1年前期に開講するキャンプ実習を対象に、キャンプのどのようなプログラムや要素が学生の人間関係、自然、安全への認識を高めているのかについて、学生のレポート分析から明らかにすることを目的とした。

2. 野外運動（キャンプ実習）の概要

野外運動（以下キャンプ実習）は3回の事前講義と4泊5日の学外実習によって構成されている。

第1回オリエンテーションでは、キャンプ実習概要（期間、場所、内容、費用など）及びプログラムの詳細と服装や持ち物に関する指導を行う。また、この時に参加学生に健康カードを配布し、持病やアレルギー、スポーツ外傷などを記入させ回収する。第2回オリエンテーションでは、実施する国立妙高青少年自然の家（新潟県妙高市大字関山 6323 - 2）の立地、環境、利用方法と野外活動における安全管理について講義を行う。第3回オリエンテーションは出発前日に行う。キャンプ実習のしおりを配布・説明するとともに、実習班を発表する。さらに持ち物や健康状態、緊急時の対応について最終確認を行う。

参加学生は例年50～70名で、指導スタッフは教員6名、非常勤2名の合計8名を基本としている。また、指導補助として野外運動ゼミに所属する2年生10数名、医療スタッフとしてアスレチックトレーナー専攻の学生が数名参加する。

実習のプログラム及びタイムスケジュールを表1に示した。初日の活動は、生活環境に慣れたり、快適に過ごしたりするための環境整備やこれから6回実施する野外炊事の方法を学ぶ。特に、ナタの使い方やけどへの注意喚起などの安全教育は全体で実施している。星座観察は地域在住の星座観察指導員の方に依頼している。曇りや雨で満天の星空を観察できないことが多いが、その場合は、星座観察のソ



写真1 トラストフォール（著者撮影）

フトを用いての講義となる。実際に星が観察できる夜には、学生同士で星座や星の名前を確認し合っている様子が見られ、星座観察への関心を高める機会となる。

二日目は仲間づくりゲームとオリエンテーリングを午前午後に分けて実施する。仲間づくりゲームは一人では解決できない課題を、グループで協力して取り組むことによって仲間意識、信頼関係、問題解決力を高める活動である。たとえば「トラストフォール（写真1）」は次のように行う。まず、班のメンバーの一人が高さ1mほどの台の上に立ち、残りのメンバーは二列になって向かい合う。向かい合った人と両手をつなぎ手のベッドを作る。台の上の人は後ろ向きのまま、手のベッドの上に棒のように倒れる、というゲームである。台上の人は2m以上の高さから後ろ向きのまま、みんなが作った手のベッドに倒れこむのである。精神的にかなり追い込まれるゲームで、恐怖のあまり泣き出す女子学生もいる。しかし、達成後はやり切った満足感や班メンバーへの感謝の気持ちを味わうことができる。学生はその他にも3～4種目のゲームを実施するが、解決できる場合もできない場合もあり、実施後のふりかえりを実施することで、仲間づくりゲームをただのゲームに終わらせない工夫をしている。

オリエンテーリング（以下OL）は、施設の常設コースを使用する。自然の家の周りには、30個のチェックポイントが設置されている。チェックポイ

表1 キャンプ実習プログラムの概要

	午前	午後	夜
1日目	7:40 大学集合	13:40 妙高到着	18:30 後片づけ、残飯整理
	8:00 学校出発	14:00 開講式	19:45～20:45 星座観察
		14:15 キャンプ場へ移動	21:00～22:00 入浴
		14:30 用具の受取	22:00 スタッフミーティング
		15:30 野外炊事の説明	
		16:00 野外炊事	
2日目	7:00 炊飯	11:30 食材配布	18:00 カレーコンテスト
	9:20 仲間づくり(1～4班)	13:45 仲間づくり(5～9班)	19:30 トレッキングミーティング
	オリエンテーリング(5～9班)	オリエンテーリング(1～4班)	終了後スタッフミーティング
		16:00カレーコンテスト準備	20:00～22:00 入浴
3日目	7:00 朝食(食堂)	15:30 自然の家到着	18:40 トレッキングパーティー
	8:10 自然の家出発	16:30 トレッキングパーティー炊事	21:00 スタッフミーティング
	9:30 トレッキング出発		20:00～22:00 入浴
4日目	7:00 炊飯	11:30 食堂	19:15～21:15 キャンプファイヤー
	9:00 テント清掃	13:30 ネイチャークラフト	終了後 スタッフミーティング
	借用物品返却 宿舎移動	15:00 至大祭準備	21:30～22:00 入浴
		17:20 夕食(食堂)	22:30 消灯
5日目	7:00 朝のつどい	11:30 昼食(食堂)	17:30 学校到着
	7:15 朝食(食堂)・清掃	12:15 妙高出発	解散
	8:45 退所点検		
	9:30 レポート作成		
	11:00 閉講式		

ントにはキーワードの1文字が書いてあり、それを繋げることで1つの文章ができる。学生は班ごとに、地図とコンパスを用いて、その文章の解読に挑む。90分という時間制限とグループがばらばらにならないというルールに基づいて競争が行われる。学生にとっては、初めてのグループ活動、初めて自然とのふれあいとなり、翌日のトレッキング・登山の準備活動として位置づけている。

二日目の夜のカレーコンテストは配布された食材に各班が考えた食材を加え、班オリジナルのカレーを作るプログラムである。追加する食材は1000円以内で、購入希望リストをスタッフに渡すと地元のスーパーで購入してくれることになっている。どんなものでもよいが田舎のスーパーにあるもの、と学生に伝えている。コンテストの評価は、カレーを説明するプレゼンテーションの完成度、見た目、味の

3部門でそれぞれ1～3点をつけ、その合計点で競う。審査員は教員やスタッフである。完成度の高いカレーや見た目はすばらしいがチョコレート味のカレー、水が多すぎてシャビシャビのカレーなどバラエティに富んでいる。このプログラムはカレーのオリジナリティを出すために学生同士の話し合いや創意工夫の機会となるばかりでなく、勝利に向けて仲間意識が深まる場と位置付けている。

三日目は登山・トレッキングで、キャンプのメインプログラムである。学生は自身の興味関心、体力状況に応じてどちらかを選択できる。登山はかなり本格的ということもあり、選択する学生は全体の20%、10～15名程度である。トレッキングは、約11kmの夢見平(新潟県妙高市)コースを4～5時間歩きながら、自然の美しさや自然と触れ合う楽しさを体験する活動である。コース途中に設定された

課題を解決しながら歩くことによって、グループ内の団結やコミュニケーションを深める機会としている。登山は妙高山（標高 2454 m）で行う。標高差約 1300 m、5 時間程度かけて全員が登頂を目指す。登山の過程で、地形変化に応じた歩行と気象に関する知識を駆使することで、安全な登山技術を身につけることをねらいとしている。また、自己の体力に挑戦していく中で常に冷静に行動し、集団の安全と行動に気遣い、集団登山の引率技術を習得する。

トレッキング・登山から帰った夜は、トレッキングパーティーが開催される。学生たちは活動の疲れも見せず、協力して料理を作る。バイキング形式で実施し、班ごとに会食を楽しむ。また、学生によるトレッキング・登山の感想、スタッフ学生の感想等を発表し合い、トレッキング・登山をふりかえる機会とする。

4 日目は午前がキャンプ場の撤収、午後はネイチャークラフト、そして夜はキャンプファイヤーである。キャンプ実習 4 泊のうち 3 泊はキャンプ場、最終日 1 泊は本館の宿泊棟に泊まることにしている。キャンプ場の撤収では、借用備品や炊事用具の返却といった返却作業とテント・テントサイト、炊事場、トイレ及びシャワールームの掃除といった清掃作業である。特に大変な作業が炊事用具の返却である。炊事で使用したナベや鉄板などはススまみれになっているため、借用当初の姿に戻るまで金たわしやスチールウールで磨き続けなければならない。学生たちの無心に鍋を磨く姿は、「来た時よりも美しく」の精神を身をもって体験していると感じる。

ネイチャークラフトは「焼き板」の壁飾りである。焼いた杉板をタワシややすりで磨き、彫刻刀で文字を掘ったり、小枝で模様を作ったりする。キャンプ実習の中で最も静的な活動であるが、作品を仕上げながら、キャンプ実習全体を個々で振り返る機会となる。

最終日のキャンプファイヤーはスタッフ学生の企画で実施される。例年天候に恵まれずキャンドルサービスになることが多い。プログラムはゲームや歌を交えながら、各班の出し物としてキャンプ実習にちなんだ「川柳」や「替え歌」を行う。「川柳」や

「替え歌」の作成はキャンプ最後のグループ協力課題である。キャンプ 4 日目ともなると、班内もかなり打ち解けた雰囲気です、みんなで協力して課題に取り組んでいる。

最終日は、キャンプ実習のまとめとして、学生はレポート作成に取り組み、その後閉講式を行う。閉講式では、お世話になった施設の方、非常勤の先生方、スタッフ学生からキャンプ実習の総括を述べていただき、最後の締めくくりとしている。学生もそれらの話を聞きながら、キャンプ実習をふりかえっているように感じられ、「以上でキャンプ実習を終了します！」の閉会の声で、学生の満足そうな充実した顔が見られる。その後、帰宅の途に就く。

以上がキャンプ実習の概要である。天候によってプログラムが変更になったり、会場が変更になったりすることもあるが、過去 10 年以上実施してきた内容である。

3. 研究方法

2014 年と 2015 年のキャンプ実習に参加した学生が最終日に書いたレポートをもとに分析した。参加した学生は、2014 年 65 名、2015 年 44 名であった。

レポート課題のテーマは、2014 年は「キャンプを成功させるために必要な要素は何か」、「キャンプの安全管理で大切なことは何か」で、2015 年は「自然について理解を深めることができた活動は何か」、「信頼関係を深めたりコミュニケーションをとったりした活動は何か」であった。

具体的には、「キャンプを成功させるために必要な要素は何か」では、自分自身の取り組み、および自分と他者との関係がキャンプを成功させる上でどのように影響し合ったのかについてその理由とともに 3 項目記載させた。「信頼関係を深めたりコミュニケーションをとったりした活動は何か」では、キャンプのどんな活動やプログラムが自分と他者の関係を意識したり、考えたりする機会になったのかを理由とともに 3 項目記載させた。「自然について理解を深めることができた活動は何か」では、自然環境の中での生活や活動を通じ、自然感や自然認識を具体例とともに記述させた。「キャンプの安全管理で

大切なことは何か」では、個人の安全管理と組織での安全管理について考えさせた。

分析方法は、レポートのそれぞれの課題ごとに関係する活動やキーワードを抽出し、集計した。分析にあたり、野外教育の定義にある「自然、他存在、自己についての創造的、調和的な理解」がどのようにプログラムや活動、あるいは環境で生じるかを明らかにすることを心がけた。

2014年のレポートは項目の集計後、関係する内容をカテゴリー化した。また、必要に応じて学生の文章を抜粋して引用した。

アンケート用紙には、個人名、学部・学科に関する項目はあった。しかし、記述内容の集計および分析において、個人名が特定されないこと、また、記述内容から、個人が利害を受けることのないよう配慮した。

4. 結果と考察

1) キャンプを成功させるために必要な要素 (2014年)⁹⁾

キャンプを成功させる上で必要だと感じたことについて集計したものを表2に示した。また、学生が記載した個々の項目について関連性が高いものをまとめ、カテゴリー化した。以下の文章ではカテゴリーは【 】で、その下位項目は「 」で示した。

キャンプを成功させるために必要な要素は【グループや仲間との関係】、【個人の資質や能力】、【健康・安全】、【行動規範】、【事前準備・事前学習】、【良い指導スタッフや自然環境】の6つのカテゴリーに分類された。個々の下位項目では、「協力すること」(47.7%)、「思いやり・助け合い・励まし合い」(33.8%)、「健康・体調管理」(30.8%)、「事前準備・事前学習」(29.2%)が上位を占めた。

キャンプでは、自然環境の中で様々なプログラムを実施する。野外炊事や仲間づくりゲーム、オリエンテーリングなどのプログラムはグループ活動で、一人では解決できない課題も含まれている。また、意図的に友人関係がほとんどない学生同士をグループとして編成しているため、キャンプ初日の活動が学生にとって居ごごちの悪い、不安な状況が察する

表2 キャンプを成功させるために必要な要素

要素	人数	(%)
【グループや仲間との関係】	82	126.2%
協力すること	31	47.7%
思いやり・助け合い・励まし合い	22	33.8%
仲間との協力・団結・チームワーク	16	24.6%
コミュニケーション	7	10.8%
仲間との信頼関係	3	4.6%
役割分担	2	3.1%
相互理解	1	1.5%
【個人の資質や能力】	37	56.9%
積極性	9	13.8%
自然やキャンプを楽しむ態度	7	10.8%
広い視野を持つ	5	7.7%
行動力	4	6.2%
協調性	3	4.6%
責任感	3	4.6%
自主性	3	4.6%
順応性	1	1.5%
笑顔	1	1.5%
リーダーシップ	1	1.5%
【健康・安全】	33	50.8%
健康・体調管理	20	30.8%
安全への配慮	11	16.9%
危険予測	2	3.1%
【行動規範】	21	32.3%
集団行動・団体行動する	9	13.8%
時間やルールを守る	8	12.3%
人の話を聞く	2	3.1%
メリハリのある行動	2	3.1%
【事前準備・事前学習】	19	29.2%
【良い指導スタッフや自然環境】	3	4.6%

N = 65, 複数回答

ことができる。しかし、そのようなグループの状況は、プログラムを実施したり、日にちを重ねたりする中で次第に解消されていく。その大きな要因が【グループや仲間との関係】の改善である。表2に示したように、ほとんどの学生が、グループや仲間との関係づくりがキャンプでは重要な要因であることを理解していくことが示唆された。

また、非日常的な環境に身を置くキャンプでは、【健康・安全】への配慮が重要であることを学生は認識していく。朝晩の気温変化、蚊やアブ、ぶよやハチといった害虫の存在についての直接体験により自然への認識を深め、さらには連泊による疲労などに対応できるよう自己管理すること、また野外炊事でのやけどやきりきずの予防、トレッキングや登山

に適した服装の準備といった個人としての安全への配慮もキャンプを成功させるためには重要な要因であることを学生は学んでいくと考えられる。加えて、集団行動をする、時間やルールを守るといった【行動規範】もキャンプでは重要であると考えている。

以上のことから、キャンプでは、グループや仲間との関係が重要ではあるが、【個人の資質や能力】を発揮すること、時間やルールを守り、集団行動を行うこと、加えて自然への認識を深めることも、キャンプを成功させるために重要な要因と学生は考えている。自分と他者の関係を学ぶグループ活動、学生個人としての自己成長、および自然への認識がキャンプ成功の重要な要因となりうることを学生自身が認識し、「自然」「他存在」「自己」の理解を深めたと考えられる。これらのことは、今回のキャンプが野外教育とし要素を含んでおり、教育的に価値のある活動であったことが示唆される。

2) キャンプの安全管理 (2014年)⁹⁾

キャンプの安全管理に関する重要なことからついて、学生レポートからキーワードの抽出後、関連性の高いものについてカテゴリー化し、1) 同様、【 】と下位項目の「」で示した (表3)。

キャンプの安全管理について、【刃物の使い方】、【活動に適した服装】、【害虫対策】、【やけど】、【健康管理】、【病気やケガ対策】、【野生動物対策】、【事前準備・事前学習】、【その他】の9カテゴリーに分類された。個々の項目では、「活動に適した服装 (長袖・長ズボン)」(58.5%)、「刃物 (ナタ) の使い方の理解」(55.4%) の2項目で、学生の安全管理の認識が高かった。次いで「やけどへの対策」(26.2%)、「自分自身の体調管理」(27.7%)、「蚊やぶよ、ハチなどの害虫対策」(23.1%) が上位に上がった。

キャンプにおける学生の安全管理に関する知識は、キャンプ実習の事前講義、「野外運動論」の講義 (履修者のみ)、そして実際のキャンプ実習で学習あるいは修得したものと考えられる。事前講義で実施した内容は 野外炊事の安全について、ナタや包丁、ガスコンロの使い方、野外炊事で発生しやすい事故、

表3 キャンプの安全管理

要素	人数	(%)
【刃物の使い方】	51	78.5%
刃物 (ナタ) の使い方の理解	36	55.4%
ナタを持たない手に軍手をする	12	18.5%
刃物の整理整頓	3	4.6%
【活動に適した服装】	42	64.6%
活動に適した服装 (長袖・長ズボン)	38	58.5%
登山・トレッキングに適した靴の準備	4	6.2%
【害虫対策】	32	49.2%
蚊やぶよ、ハチなどの害虫対策	15	23.1%
虫除けスプレーを準備する	16	24.6%
テント内に虫が入らないような対策	1	1.5%
【やけど】	20	30.8%
やけどへの対策	17	26.2%
かまどでは軍手の使用	3	4.6%
【健康管理】	20	30.8%
自分自身の体調管理	18	27.7%
規則正しい生活	2	3.1%
【野生動物対策】	14	21.5%
野生動物対策	4	6.2%
熊鈴を持つ	6	9.2%
早朝・夜の一人歩きをしない	4	6.2%
【病気やケガ対策】	14	21.5%
熱中症予防 (水分補給・防止など)	7	10.8%
食中毒の予防	5	7.7%
刃物による切り傷に注意する	2	3.1%
【事前準備・事前学習】	15	23.1%
どんな危険があるか事前に調べておく	8	12.3%
装備や備品が安全かどうかチェックしておく	3	4.6%
事前の情報収集	2	3.1%
事前に応急処置を学ぶ	2	3.1%
【その他】	9	13.8%
懐中電灯の準備	5	7.7%
ルールを守る	3	4.6%
指導者の存在	1	1.5%

N = 65, 複数回答

軍手の種類について説明した。特に毎年ナタによる切り傷が発生しているため、動画によって視覚的にナタの使い方を学習させている。野山の危険な動植物について、特にぶよやハチへの対策を解説した。ぶよは朝方や夕方以降多く発生するため、長袖長ズボンの着用を指示した。以上のような講義を受講した学生は、キャンプ実習においてその知識を活用し自分自身の身を守るとともに、レポートにおいても記述していたのは、事前講義の成果と考えられる。

一方、ほとんど講義では触れなかったカテゴリーが【健康管理】である。学生からは「なれない環境での生活なので体調を崩しやすい」とか「朝晩の気温差が大きいため、風邪をひかないよう、服装を考

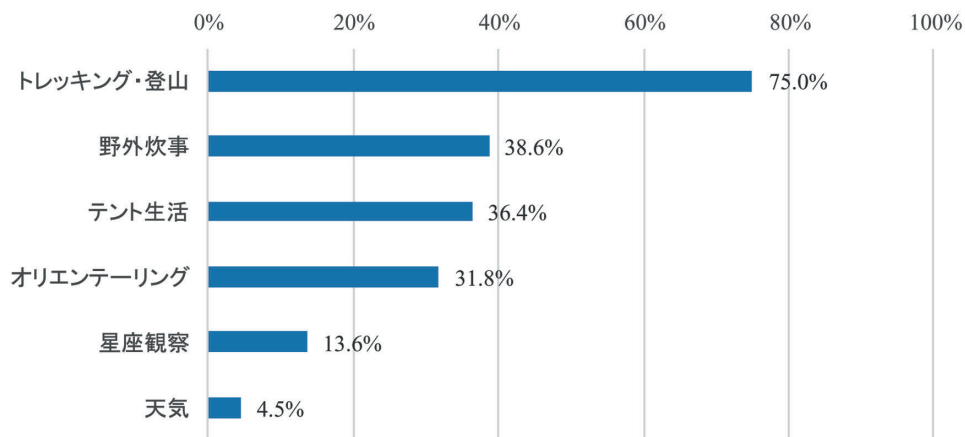


図1 自然について理解を深めた活動

える」といった意見が多くみられた。実際にキャンプで体調を崩した学生はほとんどいないが、体力が低い学生にとっては、日々のプログラムの実施に疲労感を感じたり、日常と異なる環境で寝不足になったりと、体調不良の要因は考えられる。したがって、キャンプ中の体調管理について、事前講義での説明およびキャンプ中での健康状態に配慮することが必要である。

安全管理の基本は、リスクマネジメントで、発生確率や損害の重大性をできるだけ低くしようとする行為である¹⁰⁾。まずは、リスクの事前把握が重要である。そのことに気づいた学生、「どんな危険があるか事前に調べておく」は、8名と少なかったことが残念であった。どのような方法で学生に学ばせるかも含め、今後検討していく必要がある。

3) 自然について理解を深めることができた活動 (2015年)¹¹⁾

学生が選んだ「自然について理解を深めた活動」を図1に示した。最も多かった活動は「トレッキング・登山」で33名(75%)、次いで「野外炊事」17名(38.6%)、「テント生活」16名(36.4%)、「オリエンテーリング」14名(31.8%)であった。

2015年の「トレッキング・登山」は雨での実施となった(写真2)。学生の感想には、「急な山道や上り下りがあり、雨だったため滑りやすく危険な場所が多かった」、「気温の変化が激しく、更に視界も悪く歩きづらかった」等、雨によるきびしい自然環



写真2 登山写真(著者撮影)

境によって、地面が滑ったり、転倒したりした学生や足場が悪く歩きづらかったという学生が多かった。野外活動は天候に強く影響され、それへの対処能力が求められる。天候に恵まれすべてのプログラムが問題なく遂行されるよりも、悪天候の中で不安を抱えながら実施する活動のほうが、学生への登山に対する基礎装備への意識が高まる¹²⁾との報告もあり、悪天候は学生の自然への驚異や畏敬の念を高める可能性があることが示唆される。

「野外炊事」では、火の扱い方やご飯の炊き方について普段の生活との違いについての感想が多くあげられた。たとえば「普段家で使用しているガスや電気がないため道具に頼らず一から炊事をするの大変さを知った」や、「普段は道具を使って作れるご飯も自然の中では火を起こすことから始めなければならない、自然の厳しさを知った」などである。

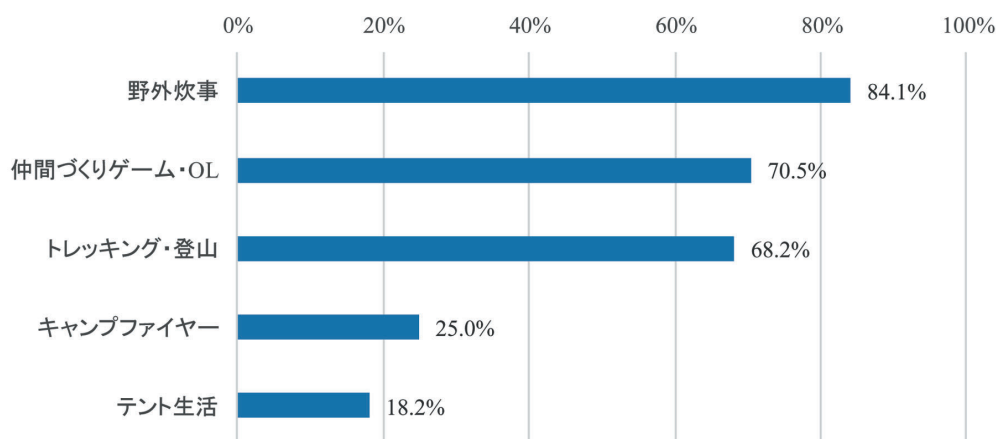


図2 信頼関係を深めたりコミュニケーションをとったりした活動

キャンプという非日常的な活動によって、逆に日常生活の便利さを理解する機会となった。「野外炊事」は、その目的や方法によって様々な意味を持つ。ここでは、学生たちが火つけから調理、配膳、食事までの過程で、自然の中での料理の楽しさと大変さ、さらに自然の中でともに食事を楽しむという原体験につながる活動となったと考えられる。

「テント生活」では、「虫がどこから入ってくるかわからない」、「虫との戦いだった」、「雨や虫の音で目が覚めた」、「朝昼晩で気温が全く違う」、「朝晩は思っていたより寒い」と虫や周囲の音、気温に関する感想が多くみられた。以前実施したキャンプの不安に関する調査¹³⁾でも「虫がたくさんいる」という不安は高い割合で認められ、自然の中に生息する虫に対する不快感、嫌悪感はキャンプ参加後も解消されないようである。

キャンプ実習における様々な活動は、学生の自然への理解を深める機会となっていたが、自然とのかかわり方や自然との共存関係を考える機会になったかどうかについては、本研究では明らかにできなかった。自然を保護・保全することの重要性¹⁴⁾を理解させるような活動を取り入れていくことが今後必要になると考えられる。

4) 信頼関係を深めたりコミュニケーションをとったりした活動 (2015年)¹⁵⁾

キャンプでのプログラムで、学生が信頼関係を深めたりコミュニケーションをとったりした活動につ



写真3 カレーコンテスト (著者撮影)

いて図2に示した。野外炊事 37名 (84.1%)、仲間づくり・オリエンテーリング 31名 (70.5%)、トレッキング・登山 30名 (68.2%)、キャンプファイヤー 11名 (25.0%)、テント生活 8名 (18.2%) の順であった。

野外炊事は6回実施した。初めは火つけ一つにしても時間がかかっていたが、回数を重ねるうちに野外炊事のスキルが高まり、班内での役割分担が明確化され、短時間でできるようになっていった。「自然の中で協力しながら食事を作ることで協力性が生まれた」、「自ら考え工夫することで達成感が生まれた」という感想もあったが、普段の生活では人と協力しながら炊事をする機会はほとんどないため、薪割りや火おこし、調理等の役割分担を考えながら実施する野外炊事は、班のメンバーとの協力性を高める有効な活動であると推察される。

カレーコンテスト (写真3) についての感想では、「カレーコンテストのために全員が本気になり、優

勝を目指すことで、絆が芽生えた」とあった。カレーコンテストという、いつもの野外炊事と異なった活動が、班のチームワークを高め、優勝に向かって協力し、コミュニケーションを取ることで、交流が増えたと考えられる。「協力しないとスムーズに調理が出来ないので、自然と会話が生まれる」という学生の感想が、野外炊事で培われるチームワークやコミュニケーション能力の重要性を示している。

仲間づくりゲームやOLは、課題を解決する過程で自然と声かけが生まれ、コミュニケーションをとるきっかけづくりとなる。「自分のことだけでなく相手の気持ちを考え、相手に合わせようとする気持ちが大切だと感じた」という学生からの感想があるように、人と関わりながら「協力」したり、「意見」を述べたりする活動は、仲間づくりに貢献すると考えられる。また、「仲間づくりゲームでは、ルールに基づいた活動を行うことで、人見知りの自分でも、友人関係を築くことが出来た」という感想から、ゲームを成功させるために自ずと話し合いが生まれていったものと推察される。またOLは、各班が目標達成に向け話し合う事が必要で、班長を中心に意見を交わすことで、自然にコミュニケーションをとることができる。

トレッキング・登山は、過酷な山道を登ったり、雨でずぶ濡れになったりする中で実施された。学生の感想では、「登山で辛い時の励ましが、どれだけ心強いかわかった」と仲間同士の声掛けの重要性を指摘していた。過酷な環境下で行われる活動では、みんなでゴールした時の達成感も大きく、仲間意識も高まると思われる。また、「SNSで話すことも会話の1つの手段だが、歩きながら話し合うことは、信頼関係が深まる最善の手段だ」と学生のレポートにあったが、トレッキング・登山の実施中、会話をしたり、声かけをしたりしていくうちに、自然と会話が弾み、コミュニケーションが深まるのである。自然の中ではお互いが直接向き合ったり、話し合ったりしなければ、コミュニケーションがとれない。学生は、そのような体験をすることで、直接会話の重要性に気づくのではないかと考えられる。

以上のことから、「野外炊事」、「仲間づくり・オ

リエンターリング」、「トレッキング・登山」は、信頼関係を深めたりコミュニケーションをとったりする活動の代表で、まさしく「他存在」と「自己」に対する認識を深める有効な活動であることが示された。

5. まとめ

本研究では、キャンプ実習に参加した2014年65名、2015年44名の実習後のレポート分析から、キャンプの効果を検証した。その結果、以下のことが示された。

- 1) キャンプを成功させるために必要な要素は【グループや仲間との関係】【個人の資質や能力】【健康や安全】【行動規範】【事前準備・事前学習】【良い指導スタッフや自然環境】の6つのカテゴリーに分類され、特に班の仲間と協力することがキャンプ成功のカギと学生は考えている。
- 2) キャンプの安全管理で重要なことは、【刃物の使い方】【活動に適した服装】【害虫対策】【やけど】【健康管理】【病気やケガ対策】【野生動物対策】【事前準備・事前学習】【その他】の9カテゴリーに分類された。これらの安全管理に関するカテゴリーは事前講義での学びがキャンプ実習で活かされている場合もあるが、キャンプ実習を体験する中で学習していく内容もある。
- 3) 最も「自然について理解を深めることができた活動」は「トレッキング・登山」であった。天候によって学生の自然に対する感じ方や認識が変化し、特に悪天候は学生の自然への驚異や畏敬の念を高める可能性があることが示唆された。
- 4) 最も「信頼関係を深めたりコミュニケーションをとったりした活動」は野外炊事(84.1%)であった。野外炊事は学生同士がコミュニケーションをとる有意義な活動であることが示唆された。

以上のことから、学生はキャンプの直接経験によって、野外教育の要素である 自然、他存在、自己についての理解を高めたり深めたりといった野外教育の要素を認識する機会となったことが示された。しかし、自然の理解をさらに深める環境教育の視点、

キャンプを安全に企画・運営するリスクマネジメントの視点といった、指導者としての視点については本研究では明らかにすることができなかったため、今後の研究課題としたい。

本結果は、一大学の結果をまとめたもので、一般化には注意が必要である。今後、本学のキャンプ実習をふくめ、実践例を増やすことが必要である。さらに、学生レポートを分析するという研究手法の妥当性・信頼性についても検討していく必要がある。

謝 辞

本研究の一部は、A 短期大学の卒業研究のデータを引用・参考にして書かれたものです。データの分析や抄録を作成した学生に感謝の意を示します。

引用文献

- 1) 星野敏男・金子和正 監修, 自然体験活動研究会編『野外教育入門シリーズ 第1巻『野外教育の理論と実践』, 2011, p. 3, 杏林書院。
- 2) 文部科学省: 幼稚園教育要領, 小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント: http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1234773_001.pdf, (2017.10.1 閲覧)
- 3) 山根真紀, 時安和行, 平田裕一「大学における野外活動実習の開講状況について」至学館大学研究紀要 48 号, 2014, pp. 31-46.
- 4) 西田順一, 橋本公雄「初年次学生の社会的スキル改善・向上を意図した大学体育実技の心理社会的有効性」大学体育学 6(1), 2009, pp. 91-99
- 5) 高山雅子, 「大学生の組織キャンプの効果に関する一考察」太成学院大学紀要, 11, 2009, pp. 85-95.
- 6) 吉田充「キャンプ体験が短期大学生の自尊感情と社会的スキルに与える影響」國學院短期大学紀要 24, 2007, pp. 3-14.
- 7) 平野智之, 植野友紀子, 海野孝「組織キャンプ体験が大学生の自己効力感と無気力に及ぼす効果」大学体育学 8(1), 2011, pp. 43-54.
- 8) 公益財団法人日本キャンプ協会指導者養成委員会編, 星野敏夫「キャンプディレクター必携」日本キャンプ協会, 2017, pp. 3-4.
- 9) 江崎碧, 小川華奈「学生はキャンプで何を学ぶのか 学生のレポートから」至学館大学短期大学部体育学科平成 26 年度体育学演習卒業研究抄録集, 2015, p. 9.
- 10) 甲斐知彦「リスクマネジメント」, 星野敏夫・金子和正監修『野外教育における安全管理と安全学習 つくる安全, 学ぶ安全 (野外教育入門シリーズ第2巻)』杏林書院, 2011, pp. 8-18.
- 11) 岡根蒼, 村松咲「キャンプ実習で学んだこと 自然についての理解 (参加学生のレポートからの分析)」至学館大学短期大学部体育学科平成 27 年度体育学演習卒業研究抄録集, 2016, pp. 102-103.
- 12) 渡邊仁「継続型登山授業における登山初心者の基礎装備に対する意識変化」野外教育研究 18(2), 2016, pp. 67-79.
- 13) 鈴木萌乃, 田島友菜, 田中裕子「キャンプ経験がキャンプ不安に及ぼす影響」至学館大学短期大学部体育学科平成 24 年度体育学演習卒業研究抄録集, 2013, pp. 124-125.
- 14) 時安和行「キャンプの対象 人間と自然の関係」(社)日本キャンプ協会指導者養成委員会編『キャンプ指導者入門第4版』, (社)日本キャンプ協会, 2010, pp. 30-35.
- 15) 稲垣早希 五ヶ山千紘「友人との信頼関係やコミュニケーションを深める活動 キャンプ実習参加学生のレポートより」至学館大学短期大学部体育学科平成 27 年度体育学演習卒業研究抄録集, 2016, pp. 104-105.